



池と石段をもつ祠があつて、昭和六十一年に上屋が造られていた。

梅垣西浦文書二ノ五、二ノ一二には「うちこし」「むかいひきた」「大宮」「うさみ」といった地名があり、守清名は小倉川及び但馬谷川の成す二つの谷にまたがつてゐたと考えられる。二つの谷を結ぶ丸山南裾の道はいかにも旧りた道で、中ほどに六地蔵が祀られて傍に板碑が寄せてあつた。丸山は墓地になつてゐる。先の済物帳に綱六丈、二貫二百五十文、現米一石七斗五合とあり、平均的な名である。

### 二、寺社について

#### 西方寺

舞鶴で西方寺といえは岡田由里北西の西方寺を想起する。しかし、梅垣西浦文書二ノ三には「代之錢一貫五百文永退松尾寺西方寺之方へ」とあり、小字図には松尾寺の南に、「西方寺」「西方寺谷」が歴然と存在している。車道の出来る前の参道が「西方寺谷」であり、その上の駐車場や畠になつてゐる平坦部が「西方寺」である。明治二十四年頃の地図(図1)には、松尾寺へ坂を北上、やがて東へまがり「下大門」を経て「西方寺」を左に見ながらやや急な坂を石段下まで登る道が記されている。現在では寺近くの人も、

のはずれに村所有の宮田がある。

阿良須神社文書の中に一宮の神田の在所を記したものがあるが、小字図によれば「宮ノ前」「大崎」「繩手」「礼垣」「松谷」「上谷」「大柳」「樋ノ口」など神社の近辺から鹿原にかけてが多く、また小倉「スガ谷」、祖母谷「サカイ」、朝来との境(田中の「御座」か)、吉坂の「大坪丁田」と志楽谷に広がっており、金剛院とのかかわりあり、春日部村の鎮守であったことを知ることができる。

#### 泉源寺

先の「西大寺済物帳」には、金剛院・松尾寺と並んで泉源寺の寺田が記されており、寄進田が増える様子がうかがわれる。<sup>18</sup>あるいは地頭の氏寺なのかもしれない。梅垣西浦文書によれば、一五一三年・一五一七年には泉源寺僧が存在していたが、一五六一年以降は村名として「泉源寺」は現れる。この頃若狭勢との小競合があり、中でも天文廿三年(一五五四)の戦いはこの地が主戦場と伝えるので、その折に焼き果たされたものか。仁王門があつたとされる所より北に、現在は十王堂と阿弥陀堂・智性院がある。西の方に寺屋敷・坊中・西ノ坊の小字があり、坊中奥に京極マリアが住んでいたという小御堂が最近まであつた。

### 三、中世の景観

#### 志楽谷

志楽谷は東西五キロばかりの巾の狭い構造谷であるが、志楽川はなかなかの暴れ川であつたようだ。昭和二十八年にも台風による大洪水で、各所の堤防が決壊し数えきれないほどの山崩れをみている。支流の鹿原谷も河原の谷であり、明治二十九年には洪水で金剛院仁王門が流出している。川筋には、ユリ・大土井・高岸・砂田・クズレ・竹林・野田・フケといった小字が並んでいるが、蛇行する川を挟んで竹籬や柳があり、所々に松や杉・檜の大木がある様が目に浮かぶ。

従つて、田畠は山間の谷より開かれて、川辺の荒地はまず桑畑として利用し、次第に湿地や海辺<sup>22</sup>の干拓を進め田畠を広げていったものだろう。特崎近くに舟塚があつたといふ。新田が開発される前には海は深く入り込んでいた。志楽川は時には上流まで海水が上つた模様である。鹿原神社の西に「舟塚」があり、吉坂に「大津」という小字、それより東の川岸を「デフネ」と言つていたといふ人もあり、かなり上流まで曳船されていたことが考えられる。

中世には、志楽川と祖母谷川が出会う地に市場が生まれている。志楽荘の年貢は次第に代錢納が多くなり<sup>25</sup>、この市場で交換されて大和西大寺へ運ばれたのだろう。一三八三年の西大寺文書<sup>26</sup>にすでに「志楽市場」とみえていいる。

吉坂峠より谷の南と北の山際に二本の道がのびるが、この道に沿う支谷や小高い地に村が生まれた。若狭街道吉坂峠の峠下集落である。吉坂峠の参詣道にあたる吉坂村にはクレ谷<sup>27</sup>・中ノ谷・下ノ谷がある。谷奥に金剛院と坊の並ぶ鹿原村<sup>28</sup>。梅垣西浦文書には「鹿原宿<sup>29</sup>」とある。上安岡には「茶屋<sup>30</sup>」があつたらしい。威光山南裾部に広がる高台に田中村、若狭街道と祖母谷を結ぶ地に小倉村、これら五つの村は、西願寺寄進署名者や一宮の氏子圈を考えると、古く一つのまとまりを持っていて思われる。

倉谷川上流の百姓谷には、金比羅山南麓に丘陵裾部の高台に集落跡も存在するが、やがて莊園役所があり(「公文」の地か)、泉源寺・土蒙西浦氏屋敷のある地域を中心として泉源寺村が成立していく。志楽谷を束ね、大浦半島の要として、海を利用しながら発展していったことだろう。

池と石段をもつ祠があつて、昭和六十一年に上屋が造られていた。

梅垣西浦文書二ノ五、二ノ一二には「うちこし」「むかいひきた」「大宮」「うさみ」といった地名があり、守清名は小倉川及び但馬谷川の成す二つの谷にまたがつてゐたと考えられる。二つの谷を結ぶ丸山南裾の道はいかにも旧りた道で、中ほどに六地蔵が祀られて傍に板碑が寄せてあつた。丸山は墓地になつてゐる。先の済物帳に綱六丈、二貫二百五十文、現米一石七斗五合とあり、平均的な名である。

**西願寺(せいがんじ)**

梅垣西浦文書一ノ一是西願寺仏聖灯油田畠寄進状である。<sup>7</sup>記されている四至より、私はこの地を吉坂中ノ谷とホソ、西荒田の谷に囲まれた地域と考える。漆が森は美味しい水が湧き、それを飲んだ人が声が出るようになつたので嬉しが森と言うとの伝承を持つが、若狭街道から松尾寺へ向かう道を少しばかり行った所には、今も道端にコップが置かれている。吉坂より安岡にかけた地を古く「やすか」と言い、中ノ谷から下ノ谷を「上やすか」と称したのではないか。安岡を今も「やすか」「やそか」と言う人があり、上安岡地域にある氏神は安川・神社である。

「細山<sup>9</sup>」の中ノ谷口には山上より下ろしたという阿弥陀堂があり、地元では山上に寺あるいは尼寺があつたと言ひ伝えてきている。山上には庵が建つなどの平担部もあり、その辺りを地元の人は「せいかんじ」と呼んでいる。昭和二十八年の台風で乱れたが、山上へ

**一宮(大森社)**

小倉にある阿良須神社は、中世には大森社、後に一宮と称されていた。慶長五年の兵火にあってフル山に再建されるまで田中村柳原にあったというが、吉坂には「一宮は山崩れで田中へ流れた」という伝承があり、「オノ神く王んし」とあるのは、同じ立敷の項目の中に「今谷」があることからも、私は「細山」を指していると考えている。

西願寺は「阿弥陀三尊三所權現の靈地」で、入力込むように「寺屋敷」という小字があり、「ホソ」付近の鉄道敷設工事の際に瓦などが出土したというので、『舞鶴市遺跡地図』には松尾寺土地台帳<sup>6</sup>には西方寺はすでに地名としての扱いである。

一方、西願寺の別の有力な比定地にJR松尾寺駅北の今谷がある。ここには「今谷」に駐車場辺りを「さいほうじ」と言う程度の認識しかないが、『丹後国加佐郡旧語集』(一七三五年)松尾寺の項には寺中院の一にあげられている。<sup>5</sup>しかし、「文政八年(一八二五)松尾寺土地台帳<sup>6</sup>」には西方寺はすでに地名としての扱いである。

舞鹤地方史研究

*吉清	秋包	吉坂	吉坂	松尾	大比定	末守	名
吉			吉			松	
坂			坂			尾	
ホ	秋		森	小		東	
ソ	加	ユ	ナ	ベ		西	
		リ	谷	谷		荒	
			向	向		田	
			田			荒田	
(梅一ノ一) 西顧寺灯油田南限吉清作、	(梅四ノ一六) 北限秋包田	(梅二ノ八) 小いね口・中路下今谷	(梅二ノ一九) 大坪 (梅四ノ七) 大坪	(梅四ノ一九) ゆりの下岩のはな道	(金一二) 西荒田・桜木本 (阿五・八	(梅一ノ一) 漆森向岸 (梅一ノ三) も	(梅一ノ一) 文書等に出てくる地名等
(梅一ノ一) 西顧寺灯油田南限吉清作、	(梅四ノ一六) ほそとうり	(梅二ノ八) 小いね口・中路下今谷	(梅二ノ一九) 大坪 (梅四ノ七) 大坪	(梅四ノ一九) ゆりの下岩のはな道	(金一二) 西荒田・桜木本 (阿五・八	(梅一ノ一) ゆりのむかへ・こた細道の下・さこした ち・こ田・おつば・うるしがもり しものきれ・ひがしあらた・ながいた に	(梅一ノ一) 文書等に出てくる地名等

春日部村名一覽表

24. 「加佐郡誌」「現時の志樂耕地の大部分は桔木ヶ浦の入江であつて字鹿原船塚まで船が出入したとの説がある」（船付か）  
25. 注3. 梅垣西浦文書「ノ一〇（一三二三年）一ノ一四（一三四三年）はか  
26. 西大寺文書『永徳三年 春日部村現米并色

27. 梅垣西浦文書二ノ一四番匠大工屋敷  
28. 金剛院文書に岩元坊・下坊・明王院坊・宝  
聚院・桜谷坊・橋本坊・福聚院。  
『慶長七年（一六〇二）寺領検地帳』には  
他に東ノ坊・中之坊・多門坊・南ノ坊など

寺遺跡発掘調査概要

30. 金剛院文書二三  
31. 京都府埋蔵文化財調査  
梅垣西浦文書四ノ七

七  
調査研究センター『泉源  
』(一九八八)

30. 金剛院文書二三  
31. 京都府埋蔵文化財調査研究センター「泉源寺遺跡発掘調査概要」(一九八八)  
29. 梅垣西浦文書四ノ七

第22号 '90.10

う前に今少し解説しておきたいものである。

(注)

1. 「舞鶴市史・史料編」所収
2. 「注進丹後国諸庄郷保惣田数帳目録」  
(「舞鶴市史・史料編」所収)
3. 西大寺文書「春日(部) 村絹代見米色々落  
物帳」
4. 作成にあたり、舞鶴市役所税務課・土木課  
・農林課・舞鶴市史編さん室、ならびにモニ  
トキ印刷の元木文美子さんには大変お世話  
になつた。記して謝したい。

また、この作業中に国土地理院発行二万五  
千分一地形図「東舞鶴」に誤記があるのを  
見付けた。「煙谷」と表記されているが、  
その位置は「クレ谷」であつて、松尾寺駅  
の南方に小字「煙谷」が存在している。

8. 梅垣西浦文書一ノ一「神安加河」一ノ一四  
「神」の中谷」
9. 「京都府地誌 加佐郡誌」（明治一〇年）  
吉坂村 古跡 西願寺址 村ノ東北字細山  
ニアリ
10. 舞鶴市郷土資料館「村里の仏たち」 阿弥陀如来に胎内銘が残り「阿弥陀三尊・延祐四年」（一四九二）と見える。
11. 舞鶴市教育委員会編「舞鶴市遺跡地図」  
(一九九〇・三)
12. 「加佐郡誌」
13. 「舞鶴市史・史料編」一九三頁
14. 参考 繪野善彦「無縁・公界・樂」(平日良須神社に残されている文書は一三五〇年
15. 「阿良須神社誌」「舞鶴市史編さんだより  
96・97・99 中嶋利雄「阿良須神社文書」。阿良須神社に残されている文書は一三五〇年

寺田二丁六反廿歩中二反泉源寺常樂会田  
地頭名

松元名の除田として

二反泉源寺常樂会田 三反同寺湯屋田

三反泉源寺寄進先代毛利殿時

五反泉源寺寄進書写山之時

19. 梅垣西浦文書四ノ一三、四ノ一八

20. 梅垣南浦文書四ノ七、四ノ八、四ノ一〇、  
四ノ一一、四ノ一四

21. 「丹後郷土資料館だより」第18号 石川登

志雄「丹後国志染荘の絹生産と春日部村の  
成立」

22. 梅垣西浦文書第三巻、第四巻に「新田」四  
ノ一三「天神田」

23. 前掲「京都府地誌、加佐郡郡誌」

吉坂村志染川（深処二尺浅処六寸廣処二間  
狭処一間）緩流海水逆行シテ鹹味ヲ帶び

おわりに

今回は、「志樂谷小字図」と数少ない史料により、中世の村春日部村の外観をわずかに見たに過ぎない。志樂谷は刻々と姿を変えている。市街化は進み、各地で圃場整備が行われてきた。吉坂地区でも来年には圃場整備が始まると聞く。他地域にはない豊富な中世史

寺中門前御先代様より御拝領地  
7. 一ノ 僧鏡円等連署田畠寄進状案  
寄進 西願寺仏聖灯油田畠事

16. 参考  
　　一舞鶴市史・某説編』「送り杉」  
小鹿島果編『日本災異志』

17. 前掲  
阿良須神社文書八・九「志樂庄一官  
神田坪付注文」

前掲  
金剛院文書一五

18. 前掲  
西大寺文書『春日（部）村綱代見半

に始まるが、初めは大森社、一四四九年の

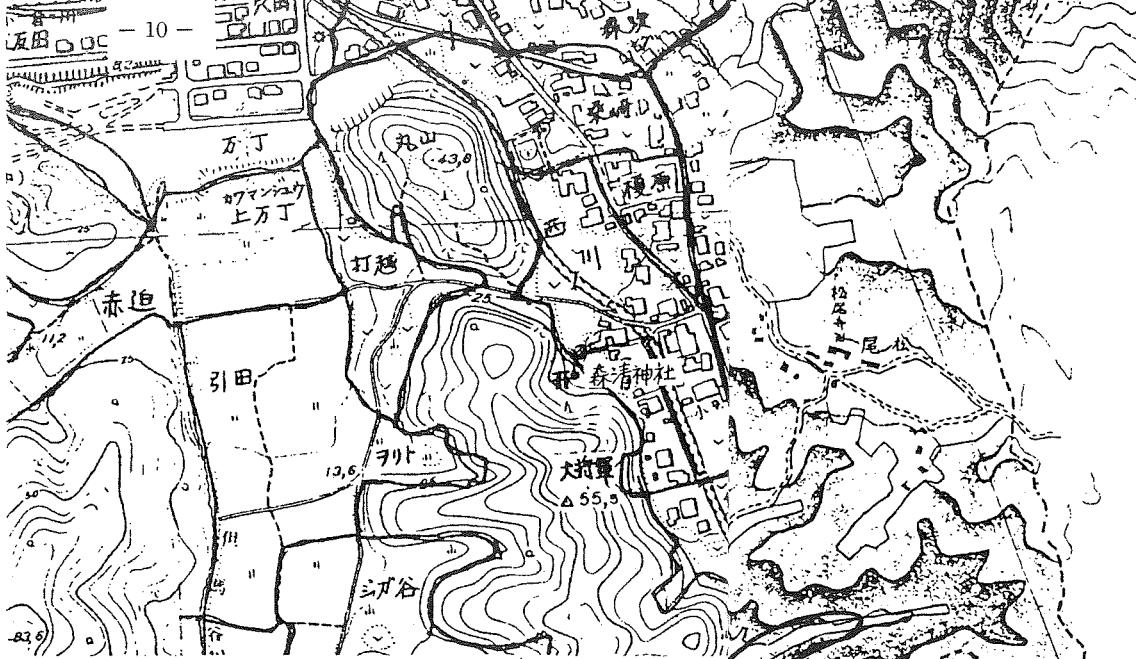
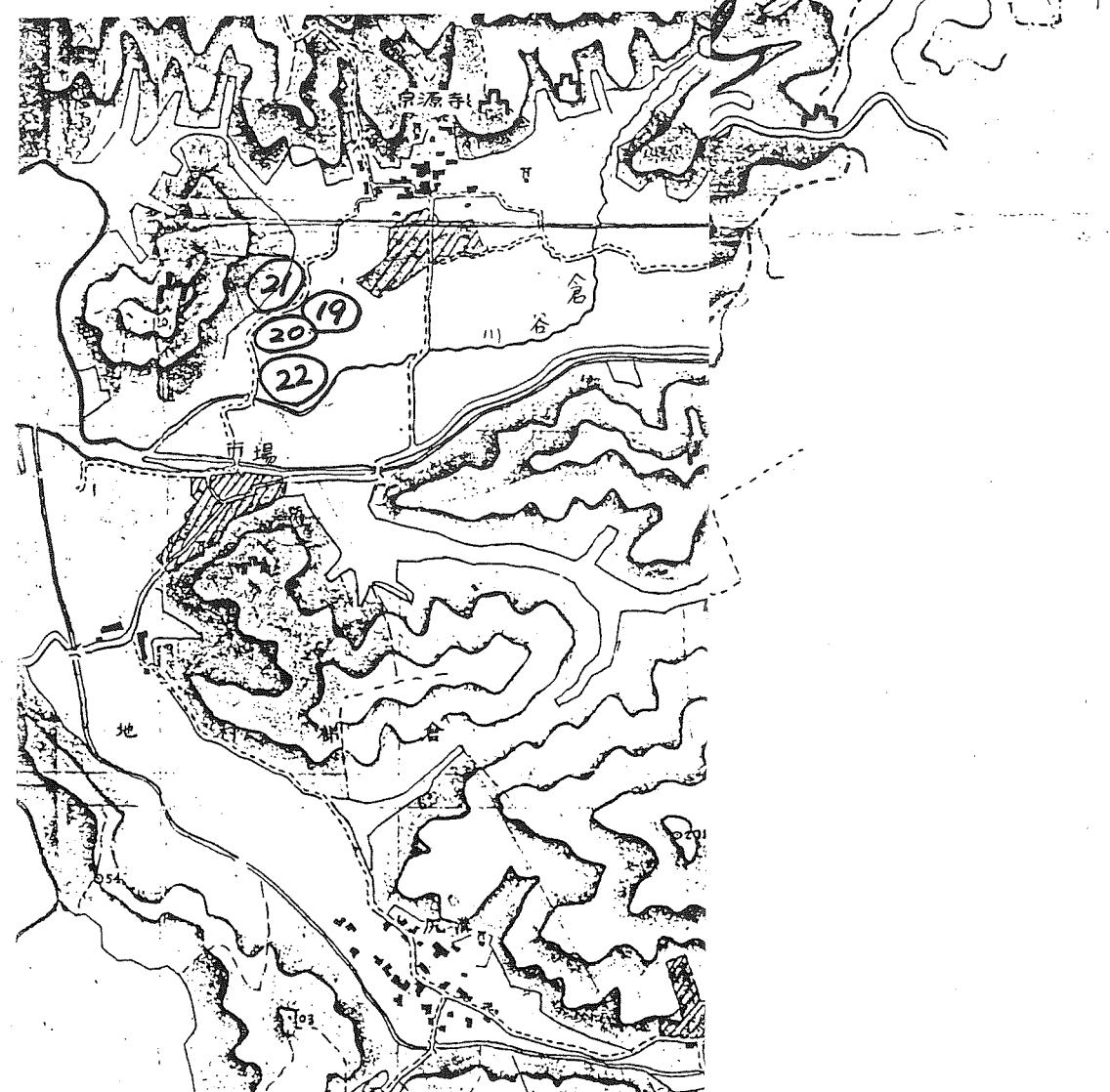


図 2 守清名付近



*元國	*久延	*友成	*貞道	*國守	*行安	*貞延	*重包	*則清	*安永	*守清	*近貞	*行永	*是元吉
田 中	安 岡	田 中	安 岡	田 中	安 岡	吉 坂	小 倉	小 倉	小 倉	小 倉	小 倉	大 迫	(梅四ノ二三)
国 森	シゲカ	成 未	民 シゲガ	寄 重	桜 谷	才ノ神	打 西	打 西	引 田	越 川	(梅二ノ五)	(梅二ノ七)	小 倉
(金一七・一九)	安岡上・桜谷	(金一三)	兵庫・依重堂所	(金一八)	田中岡之下	(金一四)	(金一二)	(金一)	(金一)	(金一)	(金二ノ二)	(金二ノ一)	(梅二ノ二・二ノ三)
18	17	16	15	14	13	12	11	10	9				(梅四ノ一〇)

(注)	*印	西願寺仏聖灯油田畠寄進状連署名 （梅） II 梅垣西浦文書（「舞鶴市史・史料編」による）	兼正	今末	友貞	安垣	他に志樂谷にみられる名	(梅一ノ一) 署名者 (梅二ノ九) 石井のるしり（梅四ノ二） (二) 石いの道の下・井の志り (梅二ノ一八) ささ田 (金二四) (金三)	行数	伊王丸	武友	秋沢	武元	恒元	守貞	成国	清延	是包	貞重	時行	安弘														
(金)	II 金剛院文書（「丹後郷土資料館報」第8号 「丹後国志樂莊関係史料（金剛院文書（上）による）」による）	(阿)	II 阿良須神社文書（「阿良須神社誌」による）	24	23	22	21	20	19																										

(梅四ノ二三) 行永十衛門方へ (金一)  
(四) 行永二郎太郎 行永家は江戸期に  
小倉村の庄屋・年寄を務めた。

(といのもと→ひのもと)  
(梅二ノ二・二ノ三) 高屋  
(梅二ノ一)

(梅四ノ一〇) 福西ノ下

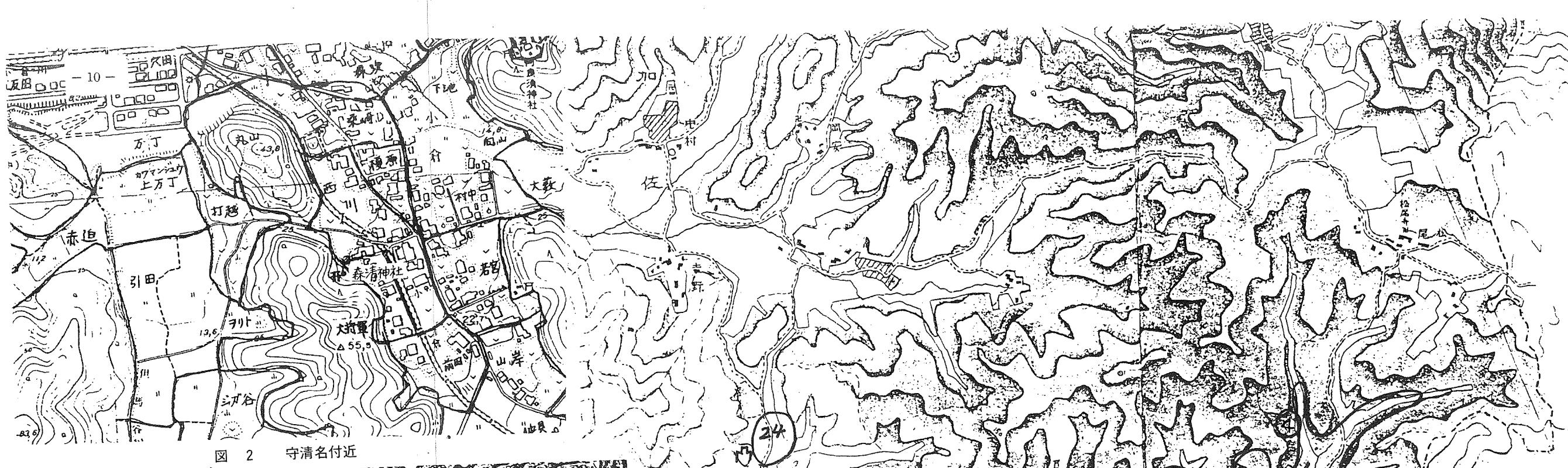


図 2 守清名付近



図 1 名の比定図  
(明治24年頃の「加佐郡全図」より)

# 志樂谷小字図 (吉坂・安岡・鹿原) 図3





志樂谷小字図 (小倉・田中・泉源寺・市場) 図3

志樂谷小字図(小倉・田中・泉源寺・市場)

高橋聰子 1990.9作成